

2

福澤諭吉における「会議」と「演説」

水野 博太（東京大学ヒューマニティーズセンター 特任助教）

日本には、多くの人々によって、これは「名演説」だ、と認識されているものが、正直言ってあまりありません。もっともこのことは、日本における「演説」というものの歴史の浅さを考えれば、それほど不思議ではないかもしれません。

よく知られているように、「speech」という英語に「演説」という漢語を当て、また自らも「演説」の実践に取り組んだのは、福澤諭吉であります。その経緯について、福澤は次のように述べております。

明治六年春夏の頃と覚ゆ。社友・小泉信吉氏が、英版原書の小冊子を携へ拙宅に來り。扱云ふやう、西洋諸国にて一切の人事にスピーチュの必要なるは今更ら言ふに及ばず、彼国に斯くまで必要なる事が日本に不必要なる道理はある可らず、否な、我国にも必要のみか、此法なきが為めに、政治も学事も將た商工事業も、人が人に所思を通ずるの手段に乏しく、之が為めに双方誤解の不利は決して少なからず。今この冊子はスピーチュの大概を記したるものなり。此新法を日本国中に知らせては如何との話に……然らば兎に角に其大意を翻訳せんとして、数日中に抄訳成りしものは、即ち『會議弁』なり。¹

この直後に、福澤はspeechという単語に「演説」という漢語を当てた経緯を述べているのですが、そこは省略致します。この『會議弁』という本は、一体どういう本かと言いますと、ごく簡単に言えば、その名の通り、日本に「会議」のやり方を紹介した本でありました。

むろん「会議」という言葉は古くからある言葉で、明治天皇の御前で侃侃諤諤の議論の末に徳川の世の終わりを決めた「小御所會議」が、上記の福澤たちのエピソードの6年前にはあった訳ですが、福澤は『會議弁』の中で、本当の「会議」というのはこうやるのだということを示そうとしているわけです。そうして「スピーチュ」というのは、少なくともこの『會議弁』の中では、単に壇上から大演説をかますというだけのものではありませんでした。『會議弁』の冒頭では、こ

1 『福澤全集緒言』時事新報社、1897年、pp. 109-110.

う述べられています。

日本にては昔の時代より、物事の相談に付き人の集りて話をするとき、其談話に体裁なくして、兎角何事もまとまりかね、学者の議論も、商売の相談も、政府の評議も、市在の申合せも、一として正しき談話の体裁を備へ、明に決着を為したることなし。……方今、学者は全国に知識見聞を博くせんと云ひ、工商は社を結て国を富さんと云ひ、政談家は民会を開て国事を謀らんと云ひ、何れも皆文明進歩の徴候にて、其事は悦ぶ可し、其人の志は好す可しと雖ども、事實に於て未だ一も行はれたるものあるを聞かず。畢竟、其事の大切なるを知て、之を実に施すの方法順序を知らざればなり。其方法の第一着とは何ぞや。集会談話の体裁、即是れなり。²

日本に話し合いが無かったとは、当然ながら、福澤は言いません。しかしこれまでの日本では、そこには「体裁」が無かった、と言います。現代においても、日本人が方々でおこなっている会議に「体裁」があるかないかと言われると、色々とお考えや、思い当たる節があるかどうかは思いますが、とにかく江戸までの日本には、のんびんだらりとした寄合や評定はあったにしても、整然とした、「体裁」の整った「会議」は無かった、と福澤は述べているわけです。そうしてその会議というのは、福澤あるいは慶應義塾の社中の理想とする日本の近代化・文明化のためには、是非ともなければならぬものでありました。

福澤は、現在の慶應義塾の校風からもイメージの付く所ではありますが、「人間交際」や「社中」の重要性を強調致しております。それは何も、現代の三田会がしばしば揶揄されるような、権力と実利のためではなく、人々が集まり、組織を作り、協力し合うことで、その個々人の力の総和よりも大きな力を発揮し、社会を動かすことができるということを、西洋での知見を通じて理解していたからでもありました。続く箇所でも、福澤はこう述べています。

……蘇張〔蘇秦・張儀〕の才弁あるも、「〔ベンジャミン・〕フランクリン」の政才「ニュートン」の学力と雖も、衆と談じて事を謀るに非ざれば、世のために益することなかる可し。況や「フランクリン」に非ず「ニュートン」に非ざる者をや。必ずしも人と智見を交易して、互に其未発の才を引出し以て大に成す所なかる可らず。³

2 『福澤全集 第三巻』国民図書、1926年、p. 703.

3 同書、pp. 703-704.

一人の天才といえども、世間を動かすには「衆と談じて事を謀る」必要があり、またお互いが「智見を交易」すれば、新たな刺激が生まれてくる。このように、人々が集い、話し合うことには大きな価値があると福澤は、あるいは少なからぬ明治の知識人たちは考えていた訳で、そこから明六社なども生まれてくる訳ですが、しかしそのような効果を発揮するための組織を作り、集団で意思決定をしていくためには、それなりの「体裁」、ディシプリンが必要であって、その方法を具体的に示したのが、この『会議弁』であった訳です⁴。

さて福澤は、これまでの日本にspeechは無かったのだと言った訳ですが、ジャーナリストの宮武外骨は『明治演説史』の中で、福澤への対抗心から、日本における「演説」の起源を色々と挙げております。たとえば、平安時代の大学寮における講義、宮中における和歌・物語などの講釈、鎌倉時代には日蓮の辻説法があり、江戸時代に降ると、町人などを対象とした様々な学問講釈、あるいは現在にまで残る落語や講談などなど、「是等の古い伝統が明治のスピーチを早く発達せしめた事は云ふまでもあるまい」と言っています⁵。

落語や講談と言うと冗談のようにも聞こえますが、しかし落語の起源というのは、庶民向けの仏教説話だとも言われておりますから、根拠が無い訳でもありません。そうして彼らの語る力というのは、明治政府の着目する所でもありました。明治初期、政府は神祇省というものを立てて神道の国教化を試み、その中で神官や神職を「宣教使」に任命して国民教化を試みておりましたが、これがなかなか上手くいきません。やがて仏教勢力のロビー活動の成果もあって、神祇省は廃止され、代わりに「教部省」が立ち、それまで神官・神職に任せていた教化事業に、新たに僧侶、はたまた落語家や講談師までも任命しておりました。

そうすると、日本にはまるで昔から「演説」があったかのように思えてまいります。しかし福澤たちが『会議弁』で構想していたスピーチと、昔ながらの講談や説教というものの間には、何らかの違いがあったのではないかと思います。

『会議弁』における演説というものは、あくまでも集団として合理的な意思決

4 『会議弁』の分量は、国民図書版『福澤全集』で27ページであり、内容は概ね以下の通り。

前半：ある村で道路工事（「道普請」）をすることになり、その工期や資金調達方法などを「会議」によって決定していく、という架空のケーススタディ。案内文の文案に始まり、当日の役割（会頭・書記などの決定）、机や座席の配置、「会議」の具体的な進め方、発言・裁決の方式、会議録の作り方などを事細かに説明する。その過程で、道路工事を行う必要性を参加者に伝えるための「演説」が行われる。

後半：三田演説会の諸規則（三田演説会は明治7〔1874〕年に発足）。

5 宮武外骨『明治演説史』有限社、1926年、p. 5.

定を行うための役割を負っています。そこにおいて演説は、自分の意思を伝え、聴き手を説得するものであると同時に、会議の参加者には平等に演説を行う権利があり、反論と対話の可能性に開かれております。そのような、言論が秩序だつて交わされる空間において、言論の力によって真理を探究しよう、あるいは適切な意思決定をしようとする試みが、『会議弁』でいうところの「会議」であって、そのような場においては、理想的には、参加者の身分、福澤流に言えば「門閥」ではなく、もっぱら言論・議論の内容がそれ単独で判断されるべきものであって、最終的な結論は、声の大きい者や雰囲気によってではなく、参加者の理性的な判断の末に、多数決によって定まるべきものであります。

『会議弁』には、福澤の作った「三田演説会」の規則も掲載されております。その「三田演説会序」には「社友、互いに猜忌憤懣の情を忘れ、専ら眼を道理の真面目に注がんことを希ひ」という文言がありますが⁶、個人の意見と人格とを分離し、もっぱら言論による真理探究を目指すという、欧米における議論・ディベートの理想像を、福澤はそのまま持って来ている訳です。それもそのはずで、実は小泉信吉が福澤の元に持ってやって来たという「英版原書の小冊子」というのは、『慶應義塾百年史』の回想によれば「アメリカン・デベーション」というタイトルであったそうです⁷。「デベーション」という単語は存在しないので、ディベートに関連した何かの単語の記憶違いだろうとは思いますが、しかしアメリカのディベート文化、その理想的形態を福澤たちは持ち込もうとした、ということは言えるかと思えます⁸。

6 『福澤全集 第三巻』国民図書、1926年、p. 719.

7 『慶應義塾百年史 上巻』慶應義塾、1958年、pp. 624-626.

8 小泉信吉がもたらしたという「英版原書の小冊子」や「アメリカン・デベーション」の正体については確定しがたいが、例えば近い時期に、次のような題名の近いディベート指南書 (*The American Debater*) が、アメリカで出版されている。

James N. McElligott *The American Debater: Being a Plain Exposition of the Principles and Practice of Public Debate: wherein will be found, an Account of the Qualifications Necessary to a Good Deliberative Orator; as also the Mode of Acquiring Them, the Rules of Order Observed in Deliberative Assemblies, Debates in Full, and in Outline, on Various Interesting Topics, Numerous Questions for Discussion, Forms of a Constitution for Literary Clubs or Debating Societies, etc., etc.*, New York: Ivison & Phinney, 1855.

同書は全312ページで、全集で30ページ弱の『会議弁』とは大きな差があり、福澤たちがこれを丸ごと翻訳したとは当然考えにくい。しかし例えば同書第16章“Constitution and By-Laws of the Young Men’s American Social and Debating Club of the City of New York”に着目すると、これはディベートクラブの規則を示したものであるが、“Constitution”, “By-Laws”, “Rules of Order”という構成になっている。一方、『会議弁』に掲載された「三田演説会規則」も「憲法」「附例」「式目」という構成になっており、内容についても類似点が多く見られる。福澤たちが同書を直接参考にしたかどうかは確定しがたいが、「三田演説会規則」を作成する際に、欧米のディベートクラブの規則がかなりの程度参考にされたと考えられることは可能であろう。

一方で落語や講談や説教には、今言ったような性質はほとんどありません。語る側と、聴く側が、意識的にせよ無意識的にせよ、これから語られる内容についてある程度の合意を既に持っているのが普通であって、整然としたルールに則った、互いに平等な参加者あるいは集団の構成員による、口頭の言論を通じた真理探究、そして意思決定を行うという理想は、宮武外骨が紹介したような例の中には、無かったのではないかと思います。

あるいは明治前期の日本では、自由民権運動を背景として、様々なディベート、特に政治演説が繰り広げられ、三田演説会はその主要な場の一つでありましたが、しかしそこにおける演説というのは、あるいは一方通行の講演、あるいは競技性や政治的目的を持ったものであって、福澤たちが『会議弁』で模索したような、結社のための、つまり集団が意思決定を行う基礎としての演説という役割は持っていなかったように思われます。

演壇から多数の人々に向かって、一方的に言葉を伝える。そういう場合において、人々の前で語られる言葉というのは、事前で練り上げられた、十分に準備された言葉に限定されてゆきます。一方で、結社の人々、社中の人々を本当に説得するための言葉というのは、演説が行われる前段階で、より少数、典型的には一対一のプライベートな説得や、いわゆる「根回し」という場面に委ねられてゆくことになります。日本に名演説というものが無い、少なくとも認識されていない、ということは、やはりこの辺りに由来するのだらうと思われます。

最後にガラッと話を変えます。フランスにINSEAD（インシアード、欧州経営大学院）という有名なビジネス・スクールがありまして、その教授であるエリン・メイヤーという人が*The Culture Map*という本を2014年に書いて、世界的に売れました⁹。日本でも2015年に『異文化理解力』という題名で翻訳されています¹⁰。

この本は、様々な切り口、たとえば日常的なコミュニケーションが、ハイ・コンテクスト（言わなくても分かる）かロー・コンテクスト（いちいち明文化する）か、何かを批判する際に率直な物言いを容認するか、それともソフトな表現が好まれるか、リーダーシップについて上下下達式か、それとも平等的でフラットか、などといった、主に企業を中心とした組織内のコミュニケーションについて、世界

9 Erin Meyer *The Culture Map: Decoding How People Think, Lead, and Get Things Done across Cultures*, New York: Public Affairs, 2014.

10 エリン・メイヤー（田岡恵監訳、樋口武志訳）『異文化理解力：相手と自分の真意がわかるビジネスパーソン必須の教養』英治出版、2015年。

各国の文化をグラフ上にマッピングして比較していくという本です。その中で、日本に関連してこんなエピソードがあります。

ある日本の製薬会社のヨーロッパ支社に勤めるヨーロッパ人の現地社員が、新製品の開発を継続するか否かを決める会議に、わざわざ欧州から東京本社までやってきてプレゼンをすることになりました。その社員は開発継続派です。彼は念入りに準備をし、当日のプレゼンやその後のディスカッションでも手応えを感じていたのですが、結果は開発中止となります。その後で彼は、なんとその会議の前から、開発を中止することが実質的に決まっていたということを知って驚きます。彼は言います。

I felt a rush of frustration, which I managed with a lot of difficulty not to display. I had spent all this time preparing my argument and had flown across the world to meet with the group, yet discussing it with them had no effect at all.¹¹

つまり、自分が誠意を尽くして準備し、会議という場で発した言葉が、何の効力も持たなかったことに驚いているのです。本の著者であるエリン・メイヤーは、これが極めて日本的な事態であると述べて、そのことを「ringi」というボトムアップ型の決済システムと、「nemawashi」という慣習によって説明しています。

組織の意思決定は、現代の日本企業、あるいは大学などの組織においても、公然たる会議の場で、言論を戦わせることによって、つまり演説によって行われるのではなく、事前の「根回し」によって既に決まっている、少なくともそういうケースが少なからず存在するわけで、そのことは結局、福澤が『会議弁』で構想したような「演説」の役割が、日本に根付くことがなかった、ということを示しているようでもあります。そうしてそのような状況では、そもそも「名演説」というものは、生まれてきようが無いのではないかとも思われます。

※『会議弁』については、以下の文献でも触れられています。参考になさってください。

平井一弘『福沢論吉のコミュニケーション』青磁書房、1996年

11 Erin Meyer *The Culture Map: Decoding How People Think, Lead, and Get Things Done across Cultures*, New York: Public Affairs, 2014, p. 155.